

機密保持を命ず

挿画:ASUKA

気温は低下しつつあった。

最高気温は、連日、摂氏二十度を下回っている。

日本州では、季節は本格的な秋を迎えている。湯気のたつ飲み物や食事、それらを一緒に摂ってくれる人物などが恋しくなる季節である。

夕暮れのひんやりとした空気を吸い込みながら日本州警の警部補・六道リインは、家路をたどっていた。その足どりが少々重い。

足どりが重くなる理由は、はっきりしている——彼の部屋に飛驒ジェンクスが潜伏しているからだ。

本来なら月面の特捜司法局にいるはずのジェンクスを彼の部屋に匿うことになってしまったからだ。否応なしに、無理やり匿わされている、というのは気が重い。しかも、ジェンクス自身の言葉によれば、彼こそが「合成人間連続損壊事件の犯人」だというのだから、刑事としての立場では、罪悪感もつのろうというものだ。匿っているのが恋人だというのならいざ知らず、元上司（同性で、そのうえ性格的にそりが合う）とは言いがたい）では嬉しかろうはずもない。

だからといって、リインではジェンクスにお引取り願うこともできない。彼は、有体に言ってジェンクスに勝てないのだ。ジェンクスが恐いのだ。これは、なにも今に始まったことではないが、今はもう一つ別の理由がある。ジェンクスが

もっている機密情報——ジョーカーに関する機密情報を教えてもらいたいのだ。

これらの複雑な思いを抱いてアパートの階段まで辿り着いたリインは、そこにミス・クインシー（大家さん）の姿を見出した。

「とってもおいしいのよ」と話しているミス・クインシーの声のリインの耳に届く。どうやら、リインよりもわずかに早く戻ってきた人が大家さんから和菓子を押し付けられようとしている場面にでくわしたらしい。

（助かった……かも。つかまつてる人には申しわけないけど、この隙に脇を通り過ぎてしまおう）

大家さんが和菓子を薦めるのは彼女の好意のあらわれだということも、お薦めの和菓子が甘党には評判がいいということもリインは知っている。知ってはいるが、彼自身は甘いものが苦手であり、大家さんの好意を素直に受けては身がもたないというのもまた事実なのだ。

（ごめんさない）

どちらにともなく心の中でつぶやいて脇を過ぎようとした瞬間

「六道さん、どうぞ」

一瞬にして体を入れ替えられてしまったリインは、ミス・クインシーと正対する羽目になっていた。

嘩然としているうちに、階段を駆け上がる足音が聞こえ、続いてドアが開く音と閉じる音が連続していた。

「あら、六道さん……」

二人は、あまりにも見事な一瞬の早業に驚き、反応できなかったが、精神的な立ち直りはミス・クインシーのほうが早かった。ラインが自分も階段を駆け上がろうと足を踏み出すより先に

「おいしい芋羊羹があるのよ」と切り出した。

「また今度、さそってください」

ラインが婉曲に断ろうとすると

「ところで六道さん、ペットなんか飼ってないわよね？」と、いきなり話題が変化した。

「ペット？飼ってないですよ」

これは事実なのでラインは胸をはって言える。

「そうよねー。飼ってないわよね……いえね、階下の人からちよつと気になる話を聞いたものだから。六道さんが出勤したあとも何だか物音が聞こえるようだって言うのよねー」

ミス・クインシーの言葉に、ラインはその場を去りづらくなる。出勤した後の物音については大いに心当たりがある。それを口に出すわけにはいかないが。

「居住人員が増えるなら増えるで、その旨、言っちゃおうだ



いね。ここは、居住定員は二名までOKだけど」

恋人と一緒に住むようになったと一人合点しているらしい口ぶりにラインは慌てた。

（大家さんの意識を他に向けるには……やっぱり、和菓子、しかないかな）

「大家さん、僕、芋羊羹いただきます！いただきます！です！」

九割がた自棄気分で言う。

ラインの目は、すでに、ミス・クインシーの手の中に芋羊羹はないことを確認している。これはつまり、芋羊羹はお持ち帰り品ではなく、彼女の部屋で芋羊羹を食べながらお薦めの（ミス・クインシーの好みの）番組を観るか、一人で観るのが恐いような番組を観るかしない限りは自分の部屋に戻れないということ在意味している。

（それでも大家さんがどのくらいまで、状況を把握しているのか確かめておかなくちや）

まさか、部屋にいるのが特捜司法局から逃亡してきた飛騨ジャンクスだ、などと判るはずもないだろう、と思う。けれど、どこかで、姿を見られているかもしれない。現にナイルには姿を見られている。

（室長が特捜司法局がらみの人間だなんてことがバレたら、『特捜司法官』大好き人間の大家さんがどんな反応を示すか、

考えるだけで恐い……)

とにかく、ミス・クインシーのもとにある情報がどの程度のものなのかを確認しないといけない、とリインは考える。(それに、居住人員が増えたと思われるのも訂正しなくちゃ。単に友人が泊りがけで遊びに来ているだけだって言うしかないかな)

実際のところ、ジェンクスは遊びにきているわけではないが、いつまでもいるというわけでもないはずだ(いつまでも居着かれては困る)から、『遊びにきている』で通してしまおう、と思う。

部屋にいるのが誰なのかを明かすことは出来ないが、恋人だと誤解されたままにしておくのはイヤだ。一緒に暮らし始めたと思われるのは更にイヤだ。

「この季節、熱いお茶に芋羊羹つていいですよね」

いかにも、嬉しそうにリインは言う。

唐突だと思われないように、情報収集が目的だなどとバレないように、精一杯の演技だが、ミス・クインシーのほうは素直に受け止めたようで、相手を崩した。

「六道さんも、なかなか判るようになってきたわね」

「大家さん、ほら、早く行きましょう」

リインは立ち話を打ち切るためにミス・クインシーを促した。

* * *

「これなんかどう？」

熱い日本茶と芋羊羹をテーブルに並べてからミス・クインシーがリインに示したのは『劇場版・特捜司法官S・A』のホーム・エディションだった。

「今日、発売だったの。予約しておいたのよ」

そう言うミス・クインシーは、まるで乙女のような表情をしている。発売日に入手できたことが嬉しくて、一緒に観てくれる人を欲していたのだということがわかる貌だった。

実のところ、リインはバーリーと一緒に『劇場版・特捜司法官S・A』を映画館で観ている。男二人で劇場に観に行つたというのは、少々情けないものがあるが、本当に一緒に行きたいジョーカーはこのところずっと音信不通になっている。多分に、解体処分の日を迎えるまで二度とリインに逢うまいと決めているフシがある——リインは決してそれを承諾しているわけではないが、ジョーカーが逢おうとしない限り、たとえ特捜司法局に押しかけたところで逢うことはできない。

(ジョーカー……)

ジョーカーと観に行くことができないなら、一人だけでも映画館に出かけるかという、それも空しい。映画は観たいが、独りでは味気ない。

同じような事情がバーリーにもあるらしく、男二人で観に行くことになってしまったのだ。

(大家さんだったら、なおのこと……かな)

お気に入りの映画を観に行くのに、女性の二人連れという

のは珍しくない。けれど単独で来ている女性というのは少なかった、とリンは劇場の観客を思い出す。一人では、観たくても行きづらいのだろう。

(それにホーム・エディションなら、好きなときに好きなだけ観ることもできるしね)

「それ、つい先日まで劇場で上映されてた分ですよね?もうホーム・エディションがでたんですか?」

リンの問いかけにミス・クインシーの表情が更にゆるむ。

「そうなの。この主演俳優が、いいのよね」

言いながらディスクをデッキにセットし

「そういえば……寿退職する特捜司法官がいるっていう噂を聞いたんだけど、六道さん、なにかご存知? 刑事さんなんだから、一般に公表されていない情報も持っていたりするんですよ?」

ミス・クインシーの言葉は、そこで中断した。

立体ディスプレイに「特捜司法官 S-A the Movie」の文字が浮かび上がり、劇場版の音楽とナレーションが始まった。

ミス・クインシーは、それ以上言葉を続けることはせずに画面を注視している。



一緒にテレビを見ている時には、途中でスポンサーのCMが入るたびにリンに話し掛けるミス・クインシーだが、映画には、CMなどないから最後まで息を詰めるようにして観ているのではないかと想像できる。

リンの目も画面に向いてはいるが、頭はミス・クインシーの言った「寿退職」について考え始める。

(それって、結婚を機に退職するっていう概念だよな。たしか…二十世紀には、さほど珍しいことでもなかったとかいう……)

特捜司法官にも退職が認められるなら、どんなにか、いいだろう。それは、リンの望むところでもある。しかしながら、現実問題として、ありえない事だと知っている。

特捜司法官というのは究極かつ最高の合成人間である。

いかに優れた能力を有していても、合成人間である以上、彼らに

「人権」はない。

以前、リンが資料管理室に異動になった際に必死に脳味噌に詰め込んだ「分類総合コード」によれば、完全人間模倣体の合成人間は「人間」の区分に入っている。しかしながら、人権はない。

特捜司法官は、特捜司法局の職員ではないのだから退職などという概念は当てはまらない。彼らは人としての姿で存在してはいるが、法律的には「人間」ではない。

分類コード上では人間の区分にありながら、法的には人間ではない、という点が矛盾ではないかとリインは思うが、事実は事実である。

机や椅子といった特捜司法局の備品には、廃棄処分はあっても退職などという項目はない。それと同様のことが特捜司法官についても言える。もっとも、特捜司法官の場合には、能力の劣化を防止するための解体処分になるわけだが。

これは、現在リインが追っている（ジェンクスがかかわっている）事件においても当てはまることで、合成人間を殺したとて殺人罪にはあたらない。ただ器物損壊罪が適用されるだけだ。

殺人罪にあたらなからこそ、ジェンクスは「この事件の犯人は自分だ」と表明できるのかもしれない。

そのジェンクスは『特捜司法局から脱走してきた』と言い、同じ口で『特捜司法局の意をうけて動いている』と言う。相反することを言いながら『これまでに嘘をついたことはない』と言う。それでいて恋人でもないリインを『マイ・ハニー』と呼ぶことを躊躇わない——これは、ジェンクスにとっては、単に嫌がらせなのかもしれないが。

同時に、彼は、自分に協力すればジョーカーの解体処分をなきものにできるとリインに囁く。特捜司法局の機構そのものを壊すために行動を起こしたのだと主張する。

いったい、どこに真実はあるのか。

ジェンクスの言葉の中に真実はあるのか。

それとも、彼は真実を述べてはいないのか。

嘘をつかないというのは、真実を話すという意味ではない。嘘はつかないが、真実も話さないという場合だつてあるのだから。

リインは、考えれば考えるほど真実から遠ざかっているような気分になる。

顔だけをディスプレイに向けたまま考え事をしていたリインの横で

「キヤー！」

いきなり悲鳴とも歓声ともつかない声があがった。

ミス・クインシーが空になった湯呑をきつく握っている。

リインが意識を画面にもどすと、そこには主演俳優の秋津がアップで映し出されており、『特捜司法官シリーズ』お約束のシーンになっていた。「犯罪者諸君……」と決め台詞が聞こえる。

（秋津さんのところにも「寿退職」の噂は届いてる……のかな。

たぶん届いてる……よね。大家さんの耳にも届くくらいなんだから）

秋津には特捜司法官の友人がいることを六道リインは知っている。ジョーカーと表裏一体の存在であるS・Aを大切に思っていると知っている。

（特捜司法官にも人権があればいいのに、退職制度があればいいのに、と秋津さんも願っているだろうけれど）

特捜司法官に「解体処分」以外の途を拓くことができるなら、どのような努力も厭わない。無論、刑事として人間として、犯罪に手を貸すことはできない。それをしてしまったなら、一番大切な人が悲しむとわかっているから。結果的にそれによって新たな途が拓けるとしても悲しませることになるから。だが、犯罪にならないことなら何でもする。秋津も同じ気持ちでいるとリインは信じている——同じ立場に立つ者として。

* * *

ほう、とミス・クインシーが深い息をついた。

画面は、青くなっている。エンディング・ロールまで終了したということだ。

「あの……」

「熱いお茶を淹れましょうか？」

リインとミス・クインシーが、ほぼ同時に口を開いた。

言いさしてやめてしまったリインに対してミス・クインシーのほうは、言葉を継いだ。

「あら？六道さん、羊羹たべなかつたの？」

情報収集と説明に來たはずのリインは、寿退職のこと、ジエンクスのこと、そして特捜司法官のことを考えているうちに時間が過ぎてしまい、肝心の時に少し出遅れてしまっていた。映画を見終わった時に、用件をどのようにして切り出すか決めていなかったのだ——単純明快に友人が來ていると言

うのか、先にミス・クインシーの情報を引き出すのか、決めていなかったのだ。

「観ることに熱中してたら、食べるの忘れてました」

リインは苦しい言い訳をする。まさか、芋羊羹は嫌いですがなどは口が裂けても言えない。「芋羊羹いただきます」とミス・クインシーの部屋に來たのだから。

「まあ、まあ、そんなに熱心に観てたのね。ホント素敵ですものねー」

ミス・クインシーは、実に理解できるとばかりに納得し

「だったら、芋羊羹はお持ち帰りになさいね」と手早く包みを用意する。

「あの……大家さん……」

お土産を手渡されるより先に、言うべきことを言わなくてはいけない。

「僕の部屋の居住人員についてなんですけど……」

「増えたの？増えてないの？」

ミス・クインシーは興味津々といった様子で問い返す。

その言葉で、彼女は居住人員について確たる情報をもっていなかったことがわかる。

リインは一気に虚脱してしまった。

人員が増えた、あるいは、リインの部屋に誰かいるという情報を持っているわけではないのなら、なにも「芋羊羹」を口実にする必要などなかったのだ。自分のほうから居住人員についての話をしないほうがよかったのだ。

なにしろ、ミス・クインシーは、法より義理人情が好きで、

おまけに好奇心を基盤とっておせっかいという悪癖をもって
いるのだ。リインのほうから話題にしてしまったなら、彼女
の好奇心が満たされるまで解放されないだろう。

「増えてるわけじゃありません……」

リインは力なく言う。

「ただ、ちよつと友人が泊りがけで来てるだけです」

それを聞くとミス・クインシーは目を輝かせた。

「お友達にも羊羹をもって行ってあげて。それともお饅頭の
ほうが好みかしら？」

話の方向性が友人についての詮索ではなく、和菓子の方に
向かった。

(よかった……)

ミス・クインシーから『友人』について質問されてもリイ
ンには答えようがない。もしも、質問されてしまったなら、
何をどう答えても嘘にしかならない。それよりは和菓子が話
題になっていくほうが、まだしもマシだと思える。結果的に
嘘をつくことになっても、罪悪感が薄くてすむ。

「いえ、お気遣いなく……。僕、この芋羊羹だけで充分です
から」

懸命の逃げ口上にも

「だから、六道さんの分は、それでいいとして、お友達に分
が必要でしょ？」

ミス・クインシーの頭の中では、友人が来ているからこそ
いつもより多めに和菓子を必要としている、という図式がで
きあがっているらしい。

「遠慮なんかしないで、たくさん持って行っていいのよ」
そう言われてもリインは困る。

「遠慮なんかしてませんって。僕、これで失礼しますから」
なんとかして芋羊羹だけで済ませたい。

(これだけでも消費するのは大変なのに)

リインの思考は、自分一人で和菓子を消費するという前提
のもとに成り立っている。飛騨ジェンクスが、和菓子を食す
のかどうかなどリインは知らない。食べ物の好みなど知ら
ない。というよりも、食べ物の好みがあるのかどうかさえ定
かではない。

(これ以上、和菓子の量を増やしたくない)

単に消費するのが困難になるという問題だけではない。

一人分の和菓子なら、ジェンクスにその発生源を問われて
も、「大家さんに押し付けられた」と答えれば済む。過去にも
例があるから不自然なことではない。だが、大量の和菓子を
持って帰ったなら『部屋にリイン以外の人間がいるとミス・
クインシーは知った』ということがバレるだろう。

それは怖い。怖すぎる。

人ひとりを匿うこともできないのか、と厭味っぽく叱責さ
れる場面が目につかぶ。仕事柄、機密保持は必須条件なのに、
と妙に静かに溜息まじりに言われる声が聞こえるような気が
する。

(誰か僕に救いの手を！)

心の叫びに応えてくれる者はいない。

彼の不幸は、まだ終わらない。